

『ライト/オフ』 プロダクション・ノート

**誰もが暗闇を恐れる。
彼女はその恐怖心を糧にしている。**

たいまつとろうそくから LED ライトへ。街灯、ヘッドライト、ネオン、照明弾。人間はこの世に誕生したときから、忍び寄り影と、その影に潜む恐ろしい何かから逃れる方法を追求してきた。

「人は誰でも暗闇を怖がるものです」と語るのは本作で製作を務めたジェイムズ・ワン。ホラー、スリラーのジャンルの第一人者だ。「子供の頃、僕たちはクローゼットの中とかベッドの下とかには何かが隠れているのだと思い込んでいて、その思いは成長してもずっと続いています。普遍的なものですよね。この映画はそんなシンプルなコンセプトで展開しており、そこがこの映画のすばらしさであり、楽しさでもあるのです」

だが、単なる恐怖や胸騒ぎではなく、暗闇にほんとうに悪意を抱くものがいたとしたら？ その存在自体が捉えどころがなく、人の恐怖心から力を得ている何かがあったとしたら？ 我々が自分を守る唯一の手段は、心を落ち着かせる灯りだろう。我々の命のよりどころは、電気のスイッチが確実に作動すること、天井の電灯の電流がきちんと流れていること、手に持つ懐中電灯の電池が十分に残っていることなのだ。

今、それが見える。カチッとライト・オン。もう見えない。

今、それは目の前にいる。焦げた指先を伸ばし、顔に息を吹きかける……。

危ない！

「人間はおそらく、太古の昔から暗闇を恐れてきたんじゃないでしょうか」と監督のデヴィッド・F・サンドバーグは言う。「暗闇だと、もう本能的に怖い。だから、その恐怖心を否定するよりもむしろ、『そのとおり。怖がって当然なんだ。だって、そこには確かに何かいるんだから』と僕たちは言うんです。僕たちはその恐怖心を利用し、そこから怪物を創り出したんですよ」

そしてその怪物には名前がある。“ダイアナ”という名前が。

本作で長編映画監督デビューを飾ったサンドバーグは、『Attic Panic』（屋根裏のパニック）、『Closet Space』（クローゼットの空間）といった、何か不穏な気配のタイトルをもつ一連の短編映画の脚本を書き、監督を務めてきた。その結果、もっと怖がらせてほしいと期待する熱烈なファンをインターネット上でたくさん獲得した。本作は、サンドバーグのそんな短編映画の一作で、同じ原題の『Lights Out』に基づいている。それは、この若きスウェーデン人フィルムメーカーにハリウッドが注目するきっかけとなった質の高さと、不眠症になりそうなほどの衝撃度の両方を兼ね備えた作品だった。

「あの短編映画を観ながら、『これはすばらしい。すごくクールで、僕自身がフィルムメーカーの卵だったときによく作ったような映画だ』と思ったのを覚えています」とワンは言う。

ワンと同じく本作で製作を務めたローレンス・グレイはこう思い返す。「デヴィッドがスウェーデンの自宅アパートである短編を作り、ソーシャルメディアに投稿したのはそんなに前の話ではないのです。あの作品はすぐに大きな反響を呼び始めました。非常にパワフルで怖かった。私はたくさんの映画を観ますが、あれはとにかく際立っていました。今では視聴回数が 100 万回を超えているので、そう感じたのは私だけではなかったわけです」

「私はデヴィッドに連絡をとり、長編映画と一緒に作ること、そしてその場合に最適なパートナーは誰かについて話し始めました」とグレイは続ける。「私が真っ先に選んだのは、驚異的な才能をもつ脚本家エリック・ハイセラー。彼はこの作品の脚本と製作を担当することになりました。そして、創造的なエネルギーの塊で、とにかくパワフルなジェイムズ・ワン。ふたりとも、この映画のアイデアにとっても興奮したので、最初からドリームチームができたというわけです」

リメイク版『エルム街の悪夢』や『ファイナル・デッドブリッジ』などの脚本で知られるハイセラーは、サンドバーグの実

験的な短編についてこう語る。「あれはすばらしい映画であり、僕の脳の本能的な部分に響きました。世界中の多くの視聴者にそうしたように、僕の原始的な恐怖を理屈抜きで刺激したのです。暗闇で何か動けば自分を捕って食おうとしているのではないかと思うのは、僕たちのずっと昔の先祖から続く恐怖じゃないでしょうか。このアイデアを膨らませて長編映画にするうえで核になったのが、ダイアナと、彼女が象徴するものでした」

彼らが目指したのは、短編のリメイクを作ることではなく、独自の邪悪な考えと陰謀をもつオリジナルの悪魔を、あの短編から引き出すことだった。ハイセラーはこう説明する。「僕たちは、ダイアナというキャラクターでまったく新しい神話を創り出したのです。デヴィッドは彼ならではの恐怖の表現をいくつか考え、それを土台に、僕は新たに独創的な形でアイデアを練りました。重要だったのは、ダイアナというキャラクターを効果的に機能させるということでした」

同様に重要だったのは、何がサンドバーグの短編を心臓が飛び出るほど恐ろしくしたのかをしっかりとつかむことだった。それは、ホラー・ファンが大好きな予想外に光るユーモアとともに、サンドバーグの情熱と洞察力から生まれたものだ。「このストーリーには恐怖シーンの構成、緊迫感とサスペンスの盛り上げ方を熟知している監督が絶対に必要であり、デヴィッドには生まれつきの才能があることは彼の作品群から明らかでした」と語るワンは、サンドバーグという新しい才能の背中を喜んで押した。「プロデューサーとして、また、このジャンルにいくばくかの経験がある者としては、新進の監督には適切なお膳立てをしてあげたいものですが、デヴィッドに関しては、彼が作りたように作らせてあげたかったです。これは彼の映画であり、彼のビジョンですからね。そして彼は見事にやってのけました」

「ジェームズの経験と知識にはずいぶん助けられました」とサンドバーグは語る。「制作過程で彼からはたくさんの貴重なアドバイスももらったのです。それに、彼はアイデアが豊富で、ものすごく熱意がありますから。製作陣に彼がいてくれてほんとうによかった」

こうしてサンドバーグ、ワン、ハイセラー、そしてグレイは一緒にストーリーを掘り下げていった。彼らは、暗闇の中でのみ現れる存在が何をきっかけに行動するのか、また、自分の邪魔をする者すべてをいかに破壊しようとするかを想像した。そのように肉付けされた本作には、オリジナルの短編映画のストーリーにさらなる深みと、さまざまな暗闇の要素が加わった。また、単に被害者でなく、観客が心を寄せ、共感し、応援したくなるように十分に練り上げられたキャラクターたちが登場することになった。

映画の冒頭で、テリーサ・パーマーが演じる主人公レベッカは、繁華街のアパートで一人暮らしをしている。父が突然失踪したあとで、まだ少女だった彼女は家を飛び出した。母ソフィーとの関係がどんどん難しく、不安定になっていったため、それ以来、母と娘は疎遠になっていた。そんなとき、10歳の異父弟マーティンが不眠と恐ろしい体験に苦しみ始め、彼女に助けを求めてきたことから、レベッカは、一度も心から我が家と思えたことのない実家に戻ることになる。

母のソフィーは変わっていなかった。むしろ、ひどくなっている。マリア・ペロが演じる彼女は一家の長なのだが、心を病んだ過去をもち、かつて療養所に入る原因でもあった非常に強い抑うつ感にいまだに苦しんでいる。今では、自室の薄明かりの中で事実上の引きこもり生活を送る彼女は、何年も前にレベッカが逃れようとした荒々しく、押さえつけるような力の中心にいることに変わりはない。さらに奇妙なことに、彼女は家の中で「ダイアナ」と呼ぶ古い友人と話をしているようだ。その“人物”が家の中を動いている様子が聞こえることはあるのだが、一瞬の影としてしかその姿を捉えることはできない。

「私はホラー映画の大ファンなので、この映画に出演できることになってすごく興奮しました」とレベッカ役のパーマーは語る。「それはもう呆然とするぐらいでした。このダイアナはまさに悪夢そのもの。人が想像できる中で、彼女ほど怖いものはありません。人って、恐怖と闇のエネルギーを同一視するものですが、ダイアナはその姿にせよ、映画の中のキャラクターとの関わり方にせよ、とにかく何よりも闇そのものなのです。悪夢以外の何物でもない感じ」

家族関係が崩壊し、苦しみに満ちたレベッカの世界だが、愛もある。そしてそれはある意味で、彼ら全員の危機を高める原因でもあった。「この映画で描かれているのは恐怖だけでなく、その不穏なものに振り回されている家族のとてもドラマチックなストーリーでもあります」とパーマー。

製作のグレイはこう語る。「この映画からホラーの要素を外し、キャラクターたちだけを見ると、ある種の苦痛に直面している家族という側面があります。その苦痛がいかに家族を分断させるのか、愛しているのに、その人から離れずにはいられない心境に、いかにそれが追い込むかが描かれているのです。レベッカが家を飛び出したのは、もともとは母親の問題からでした。でも今、彼女は自分が思っていたのよりも大きな問題があるのかもしれないと気づきます。」

超自然的な何か、完全な悪、彼女のコントロールが及ばない何かがあると。マーティンを守ると誓ったレベッカは、子供の頃に彼女自身を脅えさせた恐怖と再び対峙することになるのです」

サンドバーグがこう付け加える。「子供の頃は不気味なことが起きても、誰も本気にしてくれません。誰も信じてくれない。でもマーティンの場合は、同じことを経験していたレベッカがいる。そこがレベッカの子供のときとは違うのです。」

「ダイアナが誰なのか、あるいは何であるのかということは、観客の皆さんしだいでしょう」とソフィー役のペロは言う。「ダイアナはぼんやりとしか見えず、捉えどころがないので、彼女が何をしようとしているか分からないのです。観客はきっと映画館のイスから跳び上がるんじゃないかしら。私が脚本を読んだとき、そうでしたから。はっきりした姿はつかめず、どこに現れるのかも決して分からない。彼女はまったく予期せぬときに現れるのです」

「サプライズは確かにいくつかありますよ」とサンドバーグは請け合う。

キャストとキャラクター

女の人が……暗がりに潜んでいる。

レベッカの第一印象はおそらく、極めて自立した若い女性というものだろう。頭がよく、感傷に流されず、情け容赦なし。つねに身構えている。「彼女は一目タフな“ファイター”のような印象を与えるでしょう」と製作のローレンス・グレイは言う。「でも、ストーリーが展開していくなかで、その内面には繊細さと思いやり深さがあることが分かってきます。レベッカは問題を抱えて育ちました。人には話さないようなタイプの問題をね」

その結果どうなったのか。監督のデヴィッド・F・サンドバーグがこう付け加える。「彼女は深い人間関係を築くのが苦手になり、そのほかにも対処が難しい悩みを抱えるようになりました。それは、彼女が子供の頃に起きた出来事を乗り越えることができていないからです。テリーサ・パーマーはそういう感情をすべて、見事に演技に注ぎ込んでいます。彼女から伝わってくる感情はものすごくリアルなんです」

実家へ戻るなんて、レベッカは考えてもいなかった。だが、弟の学校から電話があり、児童福祉局のケースワーカーから、幼いマーティンが授業中に居眠りばかりしていると知らされると、レベッカには弟が夜になぜ眠れないのか、思い当たる節があった。彼女自身はかつて、それを単なるよくない夢であり、想像の産物だと自分を納得させようとしたのだが、今、マーティンに同じことが起きているならば、あれも現実だったに違いない。彼女が16歳で家を飛び出すきっかけとなった邪悪な力にマーティンが苦しめられているならば、弟に独りで闘わせるわけにはいかない。

「レベッカが、それまでに直面してきたさまざまな困難にもかかわらず、生きようとする力を失わずにいたことを私はすごくいいと思いました」とパーマーは語る。「彼女は明らかに過去の傷を引きずっているけれど、自分が使えるカードが何であれ、闘い、耐える決意を固めます。自分ひとりなら逃げるのがいちばん楽な選択だったけれど、マーティンを守る必要ができた今、彼女は弟を苦しめているものが何であれ、そこへ乗り込んでいき、弟の代わりに自分が対決する覚悟をするのです」

撮影当時10歳だったガブリエル・ベイトマンが演じたマーティンの人物像について、脚本のエリック・ハイセラーはこう語る。「マーティンは年齢よりも賢く、しっかりしているんです。彼は、母親が病気だということで、急いで大人にならなければならなかった。そして母親が病気のときは、いろいろなことがうまくいかないのです。さらに、彼は母親には秘密の、何かすごい力をもった友達がいて、自分たちの家のどこかに住んでいる、そしてその人は彼が邪魔なのではないかと感じています」

「マーティンは、ママがどこかおかしいと分かっている。彼はママを愛しているので、ママのことが心配なの」とベイトマンは言う。「マーティンは自分でも怖いんだけど、ママの前ではそれを見せないようにするんだ。彼は強がって物分かりがいいように見せて、ママを守ろうとする。それってすごく大変なんだ」

素顔のベイトマンも演じるキャラクターと同じく、共演者たちがそれに気づかずにはいられないほどの成熟と集中力を見せた。「私たちはマーティン役として、おそらく何千人もの俳優を検討したと思いますが、ガブリエルは傑出してい

ました」と語るグレイによれば、オーディションで監督から投げられた変化球を、ペイトマンがいかに受け止めたかが起用の決め手となった。「オーディションに来る子供たちは、何週間もセリフを練習し、完璧にマスターしていました。私たちはそれを振り払いたかった。そこで監督のデヴィッドは懐中電灯を1つ、手に取ると、『これは君の懐中電灯だ。僕がそれを奪ったので、君は取り返したい』という設定を子供たちに与えました。それを大勢の子供たちとやったところ、彼らはだいたい、消極的なアプローチをとったのです。でもガブリエルはその懐中電灯を取り返すためにデヴィッドを徹底的に攻撃した！ 彼は驚くほどがむしゃらだったので、彼ならどんな演技を要求しても、立派にやりとおすだろうと私たちは確信できたのです」

練習過剰もしくは指導されすぎた反応をぶち破ることを意図したそのオーディション・プロセスを「即興演習」と呼ぶサンドバーグはこう語る。「ガブリエルはひたむきに全力を出していました。彼には(挑戦することに対して)何の恐れもためらいもないことがはっきり分かったのです。それこそ、僕たちがマーティンに思い描いた資質でした」

さて、マーティンには最近まで父ポールという味方が家の中にいた。だが、ダイアナはそれに気づく。そして彼女はマーティンが一人ぼっちになるように手を打つ。

ビリー・バークが演じるポールは、ソフィーの再婚相手。だからマーティンの父親だが、レベッカの父ではない。「ポールは善良で、面倒見のいい男なんです」とハイセラー。「彼はソフィーの状態を分かっている、彼女を支えようとします。彼女を助けようとするのが彼自身をダイアナのターゲットにしてしまうとは気づかずに」

ポールは映画の冒頭シーンに登場する。舞台は彼が経営する衣料品会社の倉庫だ。「ポールは家庭の問題を必死で解決しようとしています」とバークは語る。「彼は、妻が抱えている問題は単なる気分の落ち込みだけではないと感じていて、何とか事態をよくしたい、家族をまとめたいと思っているのです。彼が帰宅しようとした直前に、倉庫で気になることが起きる。彼は暗闇で何かを見た気がして……」

その後、マーティンの危機はさらに深まり、ついに彼はほとんど知らない異父姉のレベッカに助けを求める。レベッカのほうは、いつの間にか恋人のブレットに助けを求めている自分に気づく。そのブレットについて製作のグレイはこう語る。「彼はレベッカを愛しています。そしてレベッカのほうも、自分では気づいていないけれど、彼を愛している。彼はしっかりした、精神的に安定している男なので、彼の存在によって、このストーリーには温かみという素晴らしい奥行きが加わっています」

レベッカと同じく、ブレットもタフな外見の内側に優しさが隠されている。だからこそ、彼にはおそらくレベッカの行動を通して物事がはっきり見えるのだろう。彼女が彼を完全に心の中に受け入れず、つねに一定の距離を置こうとしているのにもかかわらず、近くにいようとするのだ。演じるアレクサンダー・ディペルシアはこう語る。「ブレットはタワーがあるし、チェーンを巻いているし、デスメタル・バンドをやっているけれど、じつは誠実で信頼できる男なんです。レベッカはいつ彼が逃げ出すかとしょっちゅう思っているけれど」

そんなブレットの忠誠心は過酷な試練に遭う。レベッカ一家が苦しんできたようなことは一度も経験したことのない彼は、論理的に説明できないような邪悪な存在や物事をほとんど信じず、無邪気にその状況に飛び込む。それ自体が彼にとっては非常に大きな行為であり……彼は一度ならず何度も驚かされることになる。

本作にはホッとするようなコミカルな瞬間がいくつかあるが、その多くを担っているのもブレットだ。「レベッカとブレットがふつうの恋人同士と同じようなやり取りをしているのを見ると、雰囲気は少し軽くなり、映画を観ながら息を詰めていたり、怖がっていたりすることをちょっと忘れませよ」とディペルシアは言う。そういう瞬間はこの映画では意外に思えるかもしれないが、「片方は恋人としての関係を慎重に進めたい。もう片方は早く進めたい。夜もお泊まりがしたい。恋人たちならおなじみの状況が全部入っています」

監督のサンドバーグがディペルシアを選んだのは、彼の才能や役柄のつかみ方のうまさだけでなく、レベッカ役のパーマーとの明らかな相性のよさのためでもある。サンドバーグはこう語る。「ブレットは憎めない男で、ホラー映画で彼のような役割のキャラクターがやりそうなことはやらないんですよ。観客は、『あの彼氏、きっと死ぬぞ』と思うかもしれない。でもそうならないかも。観客は彼を応援して、彼がお約束どおりに死ぬよりは頭がいいことを願うんじゃないでしょうか」

遠い昔の話よ。ダイアナという友達がいた。
その彼女に悪いことが起きたの。

何が起きているにせよ、それはソフィーを中心にしている。今、彼女の家族の命を脅かしている嵐の真ん中にいるのが彼女なのだ。

この問題を抱えた女性を演じるマリア・ベロはこう語る。「映画に初めて登場するときから、彼女は神経が過敏な状態ですが、それはどんどんひどくなっていきます。彼女は精神的に崩れ続け、誰にもその理由が分かりません。また、彼女とダイアナとの結びつきも、それらがどのようにしてこういう現象になっているのかも分からないのです」

監督のサンドバーグはさらにこう語る。「ソフィーにはこれまで多くの問題——うつ状態、もしかすると統合失調症のような症状——がありました。それは僕がこの映画の中で掘り下げたかったことでもあります。正気を失うのは人間にとっていちばん恐ろしいことのひとつですから。僕たちは心で世界を体験する。心こそが僕らにとっての世界なんです。だから、それが壊れてしまえば、現実と現実でないものの境目がなくなり、物事は非常に悪い方向へ進む可能性があります」

ここで湧いてくる疑問は、ソフィーは果たして得体の知れない、危険なダイアナと結束しているのだろうか、あるいは、ダイアナに囚われているだけなのだろうか、ということだ。また、彼女がダイアナをコントロールしているのか、ダイアナが彼女をコントロールしているのか。

「マリアは、いつの世でも名優と目されるひとりです」と製作のグレイは言う。「ソフィーは極めて複雑なキャラクター。演じる者の立場からはとくにそうだと思います。いくつもの異なるレベルを演じ分けるわけですから。彼女はこの恐ろしい現象を自分の家族に押しつけているように思えますが、彼女が家族を愛しているのは明らかです。彼女は自分自身の悪魔と闘っていますが、彼女の状態には主に超常的な要素があるのです。そういう数多くの要素をすべて演技に込めなければなりません」

「僕はマリアの大ファンなんですよ」とサンドバーグ。「マリアはすばらしい才能の持ち主で、ソフィー役でもほんとうに見事な演技を見せてくれています。彼女の子供たちを演じたガブリエル、テリーサとの関係もじつに説得力がある」

皮肉なことに、家族の完全な崩壊の危機が、母と娘がようやく本物のコミュニケーションを取れるかもしれないきっかけになる。「ソフィーとレベッカの関係はつねに緊迫していました」と脚本のハイセラーは言う。「ふたりとも多くのトラウマを経験してきました。レベッカは起きている現象を理解せず、その多くを母親のせいだと非難していました。でも家にいたときよりも大人になった彼女は、人の感情をもっと理解できるようになっています。物事を別の角度から見るようになったのです」

「レベッカはすごく刺激的なキャラクターですよ」とベロが言葉を添える。「映画の冒頭では、彼女はユーモアいっぱい自立していてクール。でも彼女は弟と母をしっかり守ろうともしています。本人がそう望んでいるわけではないけれど、必要だから自ら進み出る。そこが彼女のほんとうの強さなのです」

一方、ダイアナも、レベッカが少女時代に遭遇したときよりもずっと強くなっている。より大胆になり、さらに怒りを増し、ますます予測できない。驚くほど機敏で、あらゆる暗がりから飛びかかってきそうな真っ黒な影……。そのダイアナは暗闇に身を潜めていることにもはや満足していないようだ。その代わりに、彼女はレベッカたちを闇に取り込みたい。

「暗闇こそ、彼女が力を発揮する場なので、彼女はどんな手を使ってでもレベッカたちを暗闇に誘い込まなければならぬのです」とサンドバーグは言う。「レベッカたちを地下室へ連れ込み、家じゅうの電気を消す。ダイアナは、自分が完全にコントロールできる場に彼女たちを引きずり込もうとします」

「ダイアナのキャラクターを書くのは複雑な作業でした」と脚本のハイセラーは言う。「彼女は光の外側で存在する。だから、電気がついているときには、彼女は“目に見えない”というだけではなく、そこにはもはや存在しないのです。つまり、光の中でなら彼女を捕まえることができると思っているなら、それは間違いなんです。彼女は実体がないんです。だから、彼女をどのように見せるか、そして彼女が何をできるかについては特定のルールがあり、僕たちはそのルールに従う必要がありました」

フィルムメーカーたちは、CGIを使うよりも、実際的な手法を選んだ。特殊メイク、特殊造形、照明、さらに女優／スタント・パフォーマーのアリシア・ヴェラ＝ベイリーの技術によって、ダイアナを表現したのだ。彼らはこの手法によって、

この実体のないキャラクターをCGによってよりも、果てしなく不気味に、そしてより衝撃的に創り出せたと感じている。

「ダイアナが登場する部分の 95 パーセントはシルエットだけなので、動き方がすべてなのです」とサンドバーグは強調する。

「アリシアは驚異的に運動神経がいいんですよ」と製作のグレイが褒めるヴェラ＝ベイリーは元体操選手。彼女はコントーション(体の柔軟性を強調したポーズ)の技術により、ダイアナを演じるうえで人間らしい動作、そして異様なまでに人間離れした動作の両方を見せた。「近づいてくるのがまるで見えないように動くことのできる速さと、とてつもなく強い肉体をもつ。私たちがダイアナをそういう存在に描くことができたのは、アリシアの能力のおかげです。ダイアナは天井からすとんと降りたり、床を這ったりする。彼女がマーティンに飛びかかり、マーティンは電気の光の中へ跳びのくシーンがありますが、私たちは、さすがに視覚効果を使わないとダイアナをうまく消えさせられないのではないかと思います。でも、アリシアは視覚効果を使ったように見えるほど素早く引っ込むことができた。ダイアナは暗闇の中へさっと消えるのです」

「アリシアがシルエットとしての衣装とメイクをフル装備して、ほのかな照明のセットで撮影をしていたときに、角を曲がって彼女に遭遇すると、思わず、『うわああ！』と悲鳴を上げたものです」とハイセラーは声を上げて笑う。

それは彼だけではなかった。多くのキャストとスタッフが、“ダイアナ・モード”のヴェラ＝ベイリーと偶然出くわしたときに、ギョッとしたりと語る。ソフィー役のマリア・ベロにいたっては、「シーンを演じている真っ最中でさえ、彼女に驚かされたことがときどきありました」と認めた。

レベッカ役のテリーサ・パーマーはこう語る。「一日の撮影が終わると、自分の体からダイアナのエネルギーを払い落とさないといけないと感じたものです。それぐらい彼女は恐ろしかった」

そこにいるのは誰？

デヴィッド・F・サンドバーグの短編映画を観たことがある人なら、本作の冒頭シーンでおなじみの顔に気づくだろう。サンドバーグの妻でスウェーデン人女優ロッタ・ロステンは、彼の短編映画の多くに主演しているだけでなく、そのすべてで彼のパートナーとして脚本・製作を務めている。

ロستنは本作で、マーティンの父ポールのアシスタント、エスターとして登場する。場所は、役目を終えたマネキンたちがずらりと並んでいる光景がすでに不気味な倉庫。終業時刻、エスターは観客とともにダイアナの不穏な影を初めて見る。長身のその姿は、周囲の闇よりさらに暗い。

「エスターは壁のスイッチで電気を消す。その瞬間、彼女は部屋の反対側で何かを見た気がするのです」とサンドバーグは説明する。「それで彼女はまた電気をつけるんですが、すると何も無い。彼女がまた電気を消すと、また見える。そしてそのたびに、それは近づいてくる」

いよいよ始まるぞという、怖いような、楽しみのような、複雑な雰囲気生まれる。倉庫がなんだか変だということ、電気だけの問題ではないかもしれないということがエスターの様子から伝わってくる。ロستنはこう語る。「エスターは自分が何を見たのかよく分からないのです。いえ、ほんとうに見たのかどうかさえ。彼女が電気をつけるとそれは消えてしまうから。それがストーリー全体のトーンを決めるのです」

フィルムメーカーたちにとって、ロステン出演は当たり前のことだった。「彼女がこの映画に参加することは重要でした。オリジナルの短編映画の成功は、デヴィッドとロッタのふたりにとっての勝利だったからです」とグレイは言う。「彼女は短編映画のファンに愛されていますし、私たちはその点を大事にしたかった。また、あのシーンの演出にはオリジナルの要素が反映されています。ただし、今回は命を脅かされるのは彼女ではなく、ポールですけどね」

視覚的・情緒的なトーンの構築

できる限り自然でリアルな雰囲気にしたいというフィルムメーカーたちの願望に沿い、本作はほぼ全体にわたり、口

サンゼルス北東部のハイランドパークでロケ撮影された。また、ダウンタウンのいくつかの既存の場所も撮影に使われた。本作には、撮影監督のマーク・スパイサー、美術監督のジェニファー・スペンス、衣装デザイナーのクリスティン・バーク、そしてメイク部門主任のエレノア・サバドゥキアら、製作のジェイムズ・ワンが過去に組んだスタッフ数人が参加している。

撮影の真っ最中、セットが組み立てられ、スタント・シークエンスが構成されていくなかで、監督のデヴィッド・F・サンドバーグは、それまでの自分の撮影方法とどうしても比較してしまっただけ多くの人たちが働いているなんて、非現実的でした。以前は予算はないに等しく、僕とロッタが自分たちのアパートで撮影したんですから」と彼は言う。「その1年後、壁にペンキを塗るスタッフがいたり、メイクや視覚効果チームがいたり、天井にドリルで穴を開けているスタッフがいたり……。とにかく信じられませんでした。まさにフィルムメーカーの卵なら誰でも夢見る光景でしたよ」

レベッカのアパートとして撮影隊が確保したのは、アベニュー56のノース・フィグエロア、地元の人々が“ロウワー・フィグ”と呼ぶ再開発で活性化させた地区にある、かつて銀行だった建物。その2階全部が撮影に使われ、いくつかある部屋のうち3つ——軋む木製の床板を付けて——がアパートのセットになった。それは美術監督のスペンスのお気に入りのセットのひとつだ。

「レベッカは、家を飛び出し、母親と距離を置いたあとで、自己改革をしたいと願う若い女性。彼女はちょっと反逆児なんです」とスペンスは言う。「彼女はまた芸術的でもあり、私はいつもそういう点に惹かれるので、彼女のアパートのデザインはとても楽しめました。私が目指したのは、彼女には周囲の人々を近づけないでおこうとする突っ張ったところがあるけれど、キッチンの片隅では植物を育てているという一面もあることを示す環境を作ることでした。つまり、彼女のアパートの大部分はハードだけど、1か所だけソフトな場所があり、それも彼女の本質だということなんです」

小道具の中でとくに重要なのが、アパートの窓のすぐ外に付けられている、タトゥー店の赤いネオンサインだ。それは不気味に点滅し、ダイアナの訪れを示す。「あれは製作のジェイムズのアイデアでした」とサンドバーグは思い返す。「ネオンが消えると、ダイアナが戸口にしゃがんでいるのが見える。ネオンが再びつくと、彼女の姿はない。そして次にネオンが点滅する間に、彼女はレベッカの寝室の中に入り込んでいる。点滅のたびに、彼女は標的に近づくのです」

ポールが不気味な影と対峙する倉庫も既存の場所を利用したセットだ。ダウンタウンのアーツ・ディストリクトにある稼働中のデニムをダメージ加工する工場を变身させた。ここで、撮影監督のマーク・スパイサーと、照明主任のマイク・アンブローズは、計画的にスポットライトのように光を点在させた。ポールはダイアナから逃れてつねに光の中にいられるように、跳んで移動するのだ。

サンドバーグのファンへのプレゼントとして、美術チームは彼の短編映画のオリジナルの“怪物”をモデルに模型を作り、ポールのオフィスの本棚に飾った。

だが、もっとも注目されるのはソフィーの家だ。家そのものが主要なセットであり、とくに重要な地下室を含め、内部には細かいセットがいくつかある。その家選ばれたのは、レベッカのアパートに变身した場所から歩ける距離にある古い大きな屋敷である。居住者がいるその家は、最近では「呪い襲い殺す」シリーズでも使われた映画ロケ地の“ベテラン”だ。深紅を基にした配色を決めた美術監督のスペンスはこう語る。「あの家は威圧感があり、この映画にぴったりでした。外観はいかめしい感じの輪郭で、いかにも硬質であり、セメントできていますが、内部は陰うつで暗く、もろい感じもします。それがソフィーというキャラクターを表現するのにふさわしいデザインなのです。彼女は今、人生の中でも暗い場所に入り込んでいるので、彼女の家をデザインするうえで、私はアンティークを多く選びました。それらはあの家が建てられた時代に合わせただけでなく、物に執着し、それによって押しつぶされそうなソフィーの状態をほのめかすためでした」

それと対照的なのがマーティンの部屋だとスペンスは指摘する。「マーティンの部屋は緑が基調なのです。彼の部屋はこの家で暗くない唯一の空間で、それはそこに生命力があるからです。ミニカーやマンガやおもちゃも置かれています。それに、ソフィーは息子を愛しているから。彼女にとって息子の部屋がどんな感じかは重要だったので、愛情を込めて整えたのです。彼女は自分の病に苦しんでいる一方で、マーティンのことを心から愛しているので、彼の部屋はその気持ちの反映でもあるんですよ」

だがマーティンにとって不幸なことに、どれほど明るい部屋であっても、地下室の恐怖をなくせるものではなかった。

スペンスはちょっとだけヒントを教えてくれる。「ポールは衣料品会社を経営しているので、家の地下室には古いマネキンがあり、その影が床や壁にできているんです。また、謎めいた文字もある。私たちはそういうものを以前、いくつかの映画で観たことがあり、今までとは違う形でそれを出したかったんですよ。それで、私ははしごや窓などの上にそれを重ね、少し組み合わせたりもしました。だから、それらの文字は一方向からしか読めないんです」

本作でもっとも怖い瞬間は何かと訊かれ、脚本のハイセラーは地下室に何があるかが分かった瞬間をその第一候補に挙げる。「何がいちばん怖いか？ たくさんありすぎて、1つを選ぶのは難しいな。僕としては、レベッカとマーティンが家の地下室を探るシーンだと思いますね」

全編を通した不穏な雰囲気を増幅させるために、「カメラをしょっちゅう低位置で回しました」と製作のグレイが説明する。「マーティンの目の位置なんです、すべてが実物よりも大きく、さらに不気味で恐ろしく見えるんです」

ダイアナの存在要因と、映画のタイトル自体を考えると、本作の最大のチャレンジといえば当然ながら、“ライト”——照明——は外せないだろう。「照明はこのストーリーに不可欠な要素なので、正しく見せるためにじっくり計画を立てる必要がありました」と監督のサンドバーグは言う。光がないことも同様に重要だったので、監督は、まだその場にいる人物や物体がはっきり見える、映画でよく使われるような青白い夜のトーンは避けた。「その代わりに、僕は本物の闇で表現することにしました。どんなものが潜んでいるか分からないような暗さです。僕は、完全に見えない部分がフレームの中にあると、より恐ろしいものだとかねてから思っていたので」

「幽霊が出る映画では、白い影にカッコいい照明をあてて魂を動き回らせることができますが、ダイアナはほぼいつもシルエットですからね」とサンドバーグは続ける。「どんな照明でも、彼女に直接あてるわけにはいかないのです。彼女がすぐ消えてしまうから。数人の警官が登場するシーンがありますが、銃口の火花だけでも部屋を照らすのに十分な光なので、彼らが彼女に向けて発砲するたびに彼女は消えてしまう。だから問題は、光の中では存在しえない“存在”をいかに照らすか、ということでした」

そこでサンドバーグと彼のチームは独創性を発揮した。光源の向きを変えるという手法だ。ストーリー上でキャラクターたちが“彼女”と遭遇するように、ダイアナを光のすぐ外、闇とのグレーゾーンで素早く捉える方法をいくつも考え出した。そのすべてが、募っていく緊迫感をさらに高める結果となった。

ダイアナがどんなキャラクターかを定めるのに一役買ったメイクは3段階に分かれ、それぞれの段階で彼女を少しずつ明らかにしていった。最初はさっと消える黒いシルエット、次にもう少しだけ細部が明らかになるもの、そして彼女が実際にどんな姿をしているか、その恐ろしい外見が完全に分かる最終段階である。撮影中ずっと、ダイアナ役のアリシア・ヴェラ＝ベイリーは、特殊造形デザイナーのマシュー・W・マンゲルが作った表面に凹凸のある黒い全身スーツを身につけていた。また、黒いウィッグをかぶり、両手と顔はメイクで覆い、目には日焼けサロンで使われるゴーグルに似た黒ずんだメガネをかけた。そのメガネによって彼女の目をカメラから隠すと同時に、小さなレンズを通してヴェラ＝ベイリーの視界を確保した。第二段階は、ダメージや変形をほのめかず、より凝ったスーツにさらなる特殊造形を施したもの。そして第三段階では、準備に約7時間と、最大で4人の特殊メイク・アーティストのチームが必要になった。

「僕らは、ダイアナの体の特定の部分で、皮膚を半透明にして、筋肉と骨を露出させるという案を思いついたのですが、特殊造形と特殊メイク・チームはそれを見事に実現してくれました」とサンドバーグは感謝する。「ダイアナには長く伸びた指があります。また、腰骨と両ひじを強調し、よりやせて見えるようにしました。そんなふうになると体の節々が突き出ていると、全身がやせこけて見えるからです。彼女はとにかくゾッとするような外見の女性なんです」

そしてソフィーも変化していく。そのプロセスはもっとさりげないものだと言装デザイナーのクリスティン・バークは言う。「彼女の外見は最初は落ち着いていて、優雅にさえ見えるけれど、状況が悪化していくにつれ、服装も乱れてくるのが分かります」

レベッカとブレットはよろいをまとうように服を着る。自分たちはタフなのだと言世の中に知らせるためだ。それは幻想的なわけだが、バークはあまり強調しすぎたくはなかった。「基本的に、あのふたりを謎めかして、ピリピリした感じに見せるのが目的なのです。黒が基本で、特徴のあるアクセサリをたくさん使って。でも、近づきにくい雰囲気にはしたくなかった」と彼女は言う。「レベッカは風変わりなネックレスをたくさん持っています。そのひとつ、カイア・クープマンというアーティストのネックレスには、チェーンにウサギの形をした手榴弾が付いているんです」

ブレット役のアレクサンダー・ディペルシアは自分たちの役柄についてこう語る。「服装やアクセサリーによって、彼らがどう見えるかと彼らが実際にどう振る舞うかという二面性ができるんです。本を表紙だけで判断はできませんよね。ブレットは、恋人とどうしても同棲したがったり、恋人の弟のためにサンドイッチを作ったりするような男には見えません。でも彼はそうする。彼らが黒ずくめの格好をして、デスメタルを聴いているからといって、(ソフィーの家で起きている)不気味な状況を受け入れられるわけじゃない。ふたりとも、誰もがそうであるように、逃げたいんです」

闇から伸びる手

「この映画では、最初に考えていたよりもずっと多くのスタントが必要になりました。撮影を進めていくうちに、多くの可能性が生まれたからです」と監督のサンドバーグは語る。「大勢の人々が飛び回ったり、壁に投げつけられたりします。ダイアナは暗闇にいる唯一の存在なので、電気がつき、彼女が消えた瞬間に、その手にあった物は何であれ、下に落ちるわけです。僕たちはその利用法をいろいろ見つけました」

「撮影における基本方針のひとつが、視覚効果の使用を最小限に留めるということだったので、ほとんどすべてが実際にカメラの前でおこなわれました」と製作のグレイは言う。「例えば、ダイアナが天井から手を伸ばし、レベッカのネックレスのチェーンをつかみ、彼女を持ち上げて空中で窒息させようとするシーンは、ハーネス、ワイヤ、そして滑車を使って実際におこなったのです」

スタント・コーディネーターのマーク・ノービーはこう説明する。「ネックレスを使うアイデアは監督のデヴィッドが出したんです。その後、ネックレスだけではレベッカの体を持ち上げておけなくなるので、ダイアナはもう片方の手を伸ばし、レベッカの髪をつかみます。レベッカ役のテリーサはそういう状態に耐えられたんですよ。その状態にするため、僕たちは彼女を少し持ち上げてから降ろしました。彼女は何でもやってみようという意欲が旺盛で、このときも見事にやってのけました。一方、ダイアナ役のアリシアのほうは天井の固定箇所につかまっていたので、ダイアナが天井の隅の壁に足を踏ん張り、身を乗り出しているかのように見えるのです。そういう演出にした意図は、ダイアナが必ずしも大人が立ったときの目の位置の範囲に現れるとは限らない、どこにでも現れうるということを観客に知らせるということでした」

ダイアナがブレットを追うシーンでは、高所から飛び降りるという演技が要求されたため、スタントダブルの出番になった。危険な着地の場所はコンクリートに見えるか、実際は高密度の緩衝材だった。そして特殊な装置によって着地直前にスタントダブルの落下速度が緩められた。

若き名優ガブリエル・ベイトマンのお気に入りのシーンの中には2回のスタントが含まれるそうだ。「1回目はベッドの下に引きずり込まれるスタントで、もう1回は、後ろ向きに引きずられるシーン」と彼は言う。「あれは楽しかった」

フィルムメーカーたちはまったくそのとおりだと言うだろう。彼らにとって、本作での仕事の大部分は楽しさばかりだった。真のホラー・ファンのためとはいえ、好きだからこそできた作品である。そして観客にも自分たちと同じように楽しんでもらえたらと願っている。インスピレーションの基になった短編映画のことを思い返しながらか、脚本のハイセラーはこう語る。「この映画に観客の皆さんがどんな反応を見せるのか、想像もできません。もし2分半の短編を観たとき、僕と同じようにずっと息を詰めてしまった人は、呼吸用に紙袋を持参したほうがいいですよ。それが 90 分続くんですから」

製作のグレイもこう付け加える。「この映画にはユニークで、ある意味、面白い恐怖がたくさん盛り込まれています。観客の皆さんは、これまでにない、エキサイティングでスリル満点の映画体験を期待してもらっていいと思いますよ。スタッフの数人からは、完成した映画を観て、つい後ろを振り返ってしまう、家に帰ったらきっと悪夢を見ると言われましたが、この映画の場合、それはうれしい感想です」

そもそもの始まりはソーシャルメディアで大人気を博していた小品だった。それを最初に見いだしたグレイたちと同じく、製作のジェイムズ・ワンも、そのアイデアが遥かに大きなスケールで、より幅広い観客にアピールする可能性があると感じた。だが彼は、この映画がこれだけ特別な作品になったのは、その核にあるデヴィッド・F・サンドバーグのビジョンとパワフルなコンセプトのおかげだと言う。「デヴィッドはこの映画を、僕がまさに愛してやまないような作品

にしてくれました。子供の頃に楽しんだような映画——怖いけれど、同時にとことん楽しめる内容で、もっと観たいと思わせるような娯楽性に富んだクールなホラー映画——を作ってくれたのです」

そして観客はおそらく、人間の本質に関して考えるだろう。サンドバーグはこう語る。「僕はこの映画が人々を怖がらせるとすれば、それは暗闇の恐怖は実際には未知のものに対する恐怖だからであり、その意味では誰にでも共通するものだからじゃないかと思います。そこに何が隠れているのか、そしてそれが自分を追ってくるのかどうか分からない。家で電気を消した瞬間に、『あの隅っこに誰か立ってる?』と思ったことがある人も多いでしょう。そして再び電気をつけて、『ああ、コートか』などと思うわけです。完成したての頃の試写会で観客と一緒にこの映画を観て、彼らがものすごくストーリーに入り込んでいたこと、そして、シーンに反応して跳び上がったり、ときには声を出して笑ったりするのを見て、僕はとてもうれしかった」

そしてイタズラっぽく、彼はこう付け加える。「この映画を観たら、『ジョーズ』を観たあのような気分になるかもしれませんね。海に入るのが怖くなる代わりに、電気を消すことがますます怖くなるかも！」